



池上本門寺に入る万灯練り行列



東 泰規 Yasunori Higashi

1957年 和歌山県生まれ
1983年 広島大学大学院工学研究科修了
1986年 坂倉建築研究所入所
2009年 代表取締役所長
2013年 E.A.S.T.建築都市計画事務所設立

設計・監理
東急電鉄、
東急設計コンサルタント
デザイン監修
E.A.S.T.建築都市計画事務所

池上線池上駅・エトモ池上

歴史・人・まちをつなぐ駅

プロジェクトの経緯と背景

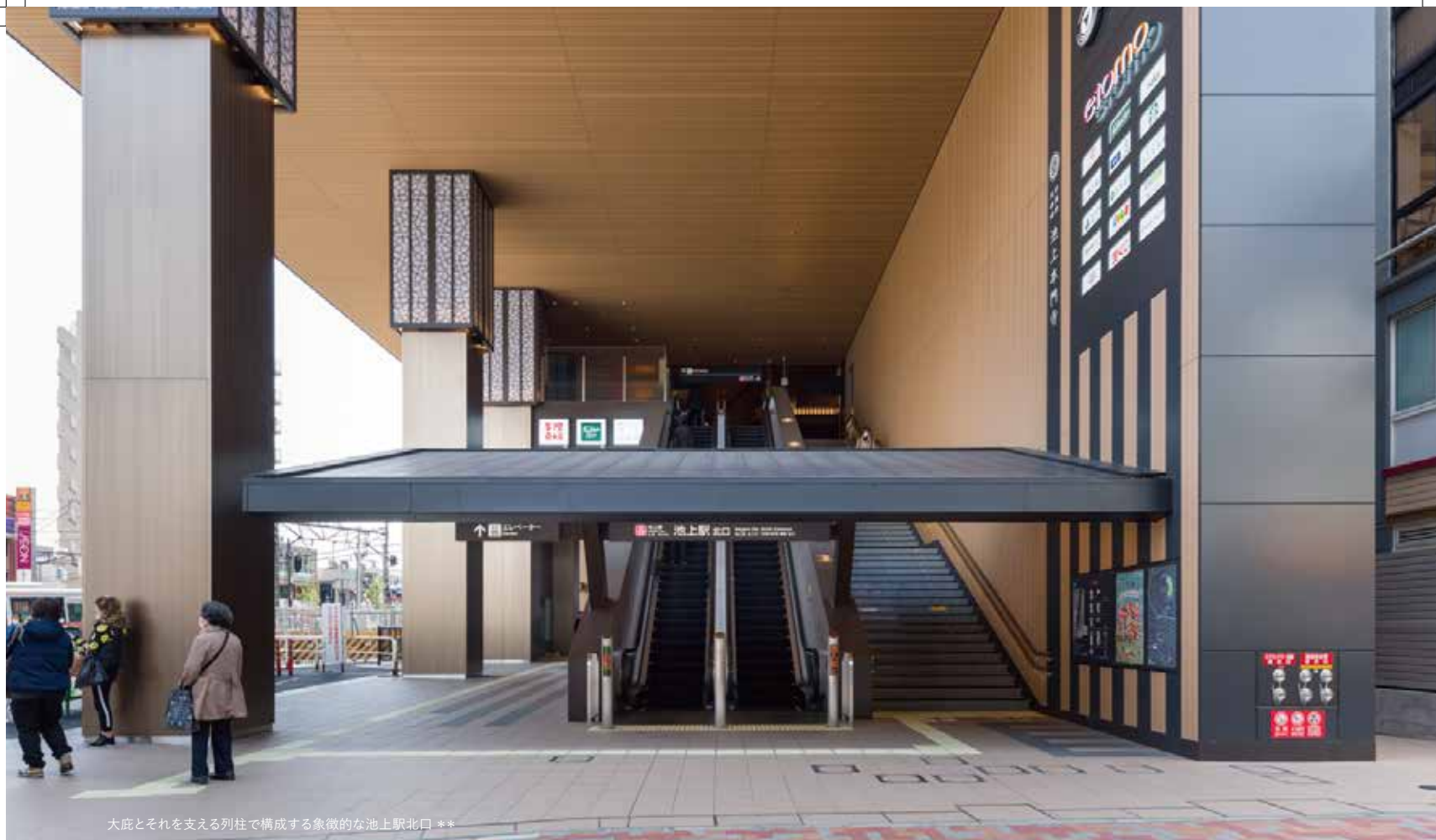
池上線池上駅は築100年近い平屋の木造駅舎で、東急線最後の構内踏切解消のための橋上駅舎化と上階の駅ビル化が構想されていた。2016年デザインの指名コンペが実施され、デザイン監修者としてE.A.S.T.建築都市計画事務所が特定された。高度成長期に郊外に居をかまえていた人々が、高齢化により利便性を求めて駅周辺に回帰していることもあり、これからの駅の役割はとても重要と考えていた。今までの「通過するだけの駅」という従来の駅概念から、「時間消費型で滞在する駅」「まちを繋げ、まちのハブとなる駅」「地域性を生かした個性ある駅」「まちづくりの起点となる駅」にしたいとの想いで提案をおこなった。

この提案に事業者の強い想いが重なり、以後コンセプトを共有しながら設計・監理を担当する東急設計コンサルタントとの協働の下、2020年7月に新しい駅の運用が開始、本年3月に池上駅商業施設「エトモ池上」がグランドオープンした。

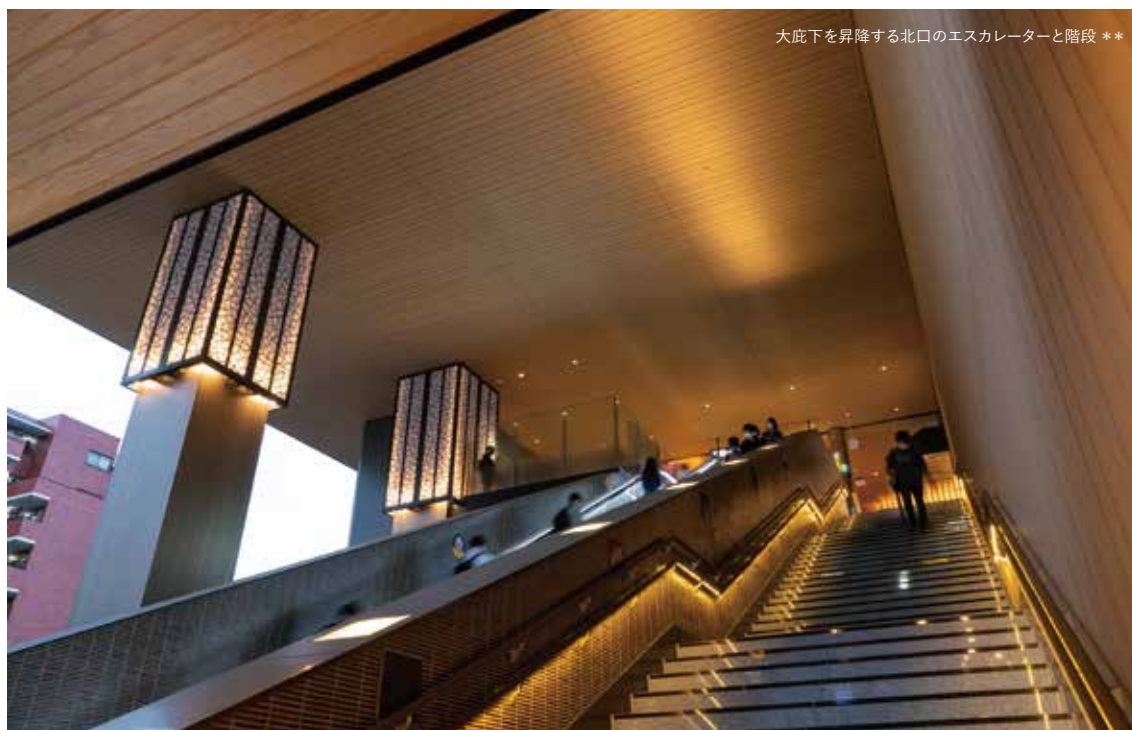
池上線は約100年前に池上本門寺の参拝者のために池上―蒲田間で開業したという経緯があり、池上は池上本門寺の門前町として栄えてきた歴史がある。毎年日蓮聖人が亡くなった10月13日を中心にお会式が営まれ、池上のまちを練り歩く万灯練り行列には30万人が訪れる。また、この時期に開花するという池上大坊本行寺の「お会式桜」は6カ月ほど花を咲かせるようである。

北口全景 *





大庇とそれを支える列柱で構成する象徴的な池上駅北口 **



大庇下を昇降する北口のエスカレーターと階段 **

池上本門寺への起点としての駅のデザイン

池上駅北口は池上本門寺への玄関口となるため、列柱で力強く大庇を支え、まちに大きく開いた象徴的なデザインとしている。

壁面と大庇天井は駅としての長期間に渡る安全性とメンテナンス性を考慮して、アルミスパンドレ

ルと再生木が一体化した素材を使用し、木で包まれた大空間を実現している。大庇上部の池上本門寺を望む「池上テラス」は、飲食店舗と連動するテラスとして活用されている。



駅ビルに線路が入る東側ファサード *



線路による分断解消のため新しく設けられた南口 *



駅コンコースの両サイドに商業施設が配置された「池上仲見世」*

池上は池上本門寺の門前町として栄えた経緯から、2階の改札を出たコンコース両側の商業施設は、低く抑えた庇と瓦風の床タイルで「池上仲見世」として参道の雰囲気演出している。

また、江戸時代に遊ばれたという紋切りをヒントに食材の紋をデザインした暖簾を設置することで賑わい感を出している。庇上部は木製ルーバーを設置し背後に間接照明を配置しているが、駅を利用する通勤通学者を想定して、朝は元気に送り出す白色系の灯り、夕方以降は温かく帰宅を迎える暖色系の灯りに切り替え、利用者の気分寄り添う駅を目指している。

改札を出ると参道の始まり、「池上仲見世」



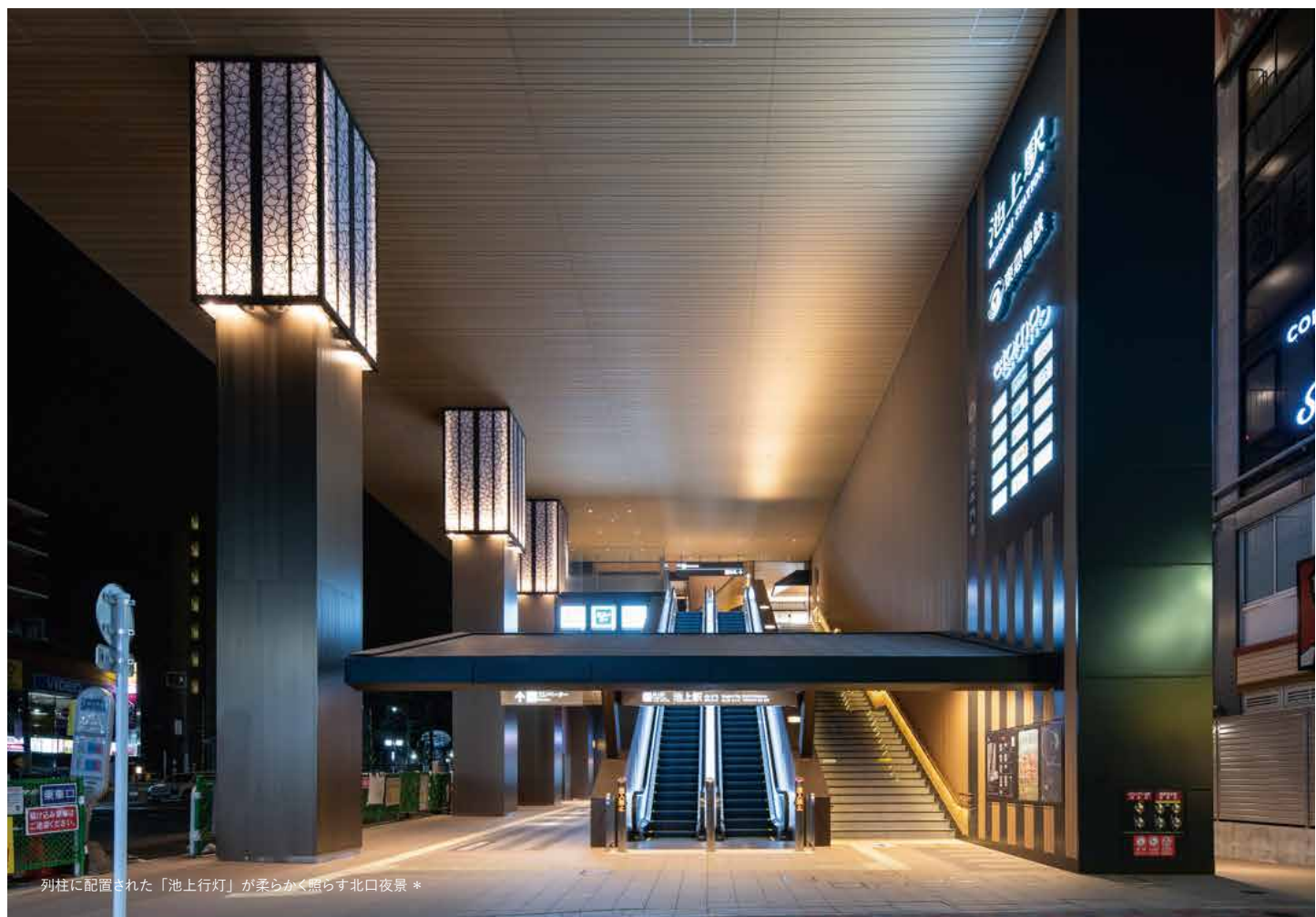
改札を出ると「池上仲見世」が始まる *



池上本門寺への起点としてまちに開く北口 **



エレベーターホールから外に連続する「池上行灯」*



列柱に配置された「池上行灯」が柔らかく照らす北口夜景 *



多様な間接光でまちを照らす北口夜景全景 *

利用者とまちを照らす「池上行灯」

お会式で練り歩く万灯練り行列は闇に浮かび上がる万灯が象徴的である。池上駅においても利用者を迎え、まちを照らす光をデザイン上の重要な要素と捉え、「お会式

桜」を抽象化したデザインで、池上仲見世から北口の列柱までビル各所に「池上行灯」を配置している。また、東口に面するエレベーターシャフトはカーテンウォール

で内部に照明を設置することで建物を行灯化してまちを照らしている。



あえて天井高さを抑え、壁、天井を多摩産材の杉で覆うヒューマンスケールなホーム **



杉材で覆われたホームと改札をつなぐ昇降空間 **



トイレへの視線を制御する木製ルーバー **



壁面と一体化した木製ベンチ、広告は場所を限定して配置 *

池上線は木造駅舎が特徴であり、戸越銀座駅、旗の台駅では「木になるリニューアル」として木造駅舎に更新されている。池上駅は上部に駅ビルを配置しているため木造化は困難であるが、仕上げ材として多摩産の杉材を多用している。特にホームは壁、天井を杉材で覆うことで、池上線の特徴であるヒューマンスケールなホームを継承している。

また、以前から親しまれてきた木製ベンチは壁面と一体化し再生している。

池上線の木造駅舎の継承



通過する電車を見下ろすエスカレーター脇の窓際ベンチ **



カフェと一体で利用できる図書館が配置された4階エスカレーター廻り **



断面構成

「まちの居間」としての駅ビル

駅上部にはスーパーマーケットや図書館など、生活利便施設が配置され、各階エスカレーター脇には線路を見下ろすベンチを用意している。買い物や図書館利用者など駅を通過する電車を上から臨む人々で賑わっており、当初の意図通り地域の人々が佇む「まちの居間」が実現したのではないかと考えている。

(E.A.S.T. 建築都市計画事務所
東泰規)

駅からつながる商空間

エトモ池上は、商業・サービス機能を充実させ、より便利で過ごしやすい場所に「池上に住みたい・住み続けたい」と思ってもらえるような、池上エリアの新しいシンボルとなることを目指した。

改札を出ると池上仲見世が両側で賑わいをつくり、地場産品を扱う店舗や行政と連携した観光コーナーが池上らしさを演出しながら、そのままオープン空間のエスカレーターで北口に広がる商店街の賑わいへとつながっている。

3階はスーパーマーケットとカフェテラスを併設した物販テナントで構成され、生活に密着し普段使いの用途である。まちに面した「池上テラス」からは池上本門寺を望め、まちとつながる場所とし



2階のエトモ池上エントランス空間 *



桜を抽象化したパターンをあしらった共用サインスペース *

でも機能する。

4階に移転した池上図書館は隣接するカフェとシームレスにつながり、利用者が本と飲み物を相互に持ち込むことのできる落ちついた空間を創出した。両施設の顔となるエントランスには門型のゲートを設け一体的な空間を強調し、図書館、カフェ、エトモ池上の共用廊下の床をすべて同材にすることで、フロア全体が緩やかにつながる。

5階は保育所とクリニックで構成され、目的性の高い生活支援拠点である。親子連れをはじめ多世代が多く訪れることから、窓際には電車の車窓をイメージしたベンチを配し、ゆっくりと過ごすことができる空間とした。

エトモ内の利用者動線結節点には、池上らしさを表現した布地の

サインや旧池上駅舎の木材を再利用した「えきもく」の配置など、池上の歴史を紡ぎ、エトモ池上ならではの商環境を演出した。一方で駅から連続する紋切パターンを商業フロアでも展開させ、駅と商業施設が一体で感じられる空間を創出した。

(東急設計コンサルタント 小島裕史)



小島裕史 Hiroshi Kojima

1986年 長崎県生まれ
2010年 熊本大学大学院自然科学研究科
博士前期課程修了
東急設計コンサルタント入社

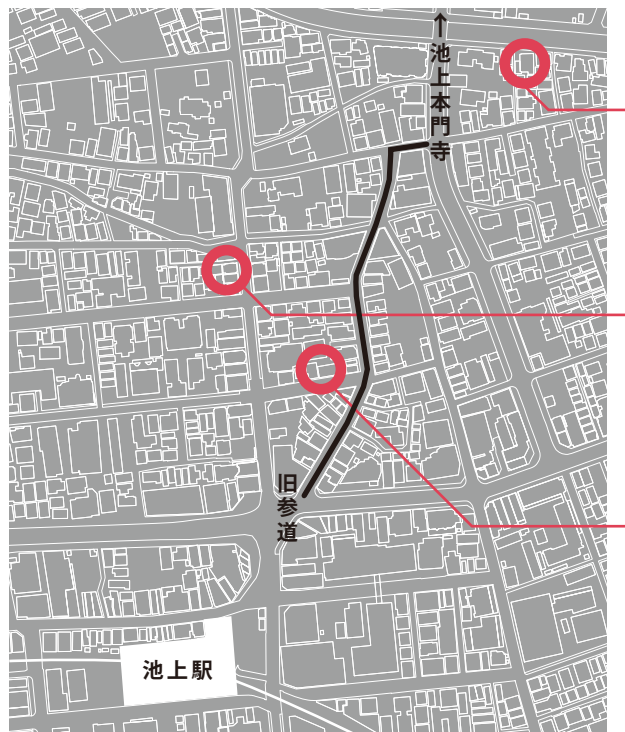
池上エリア リノベーションプロジェクト

池上駅改良を1つのきっかけとして、エリア全体の持続可能なまちづくりへの取り組みをおこなっている。2019年3月に大田区と「地域力を活かした公民連携によるまちづくりの推進に関する基本協定」を締結し、池上駅周辺をその第1号モデル地区として「池上エリアリノベーションプロジェクト」を推進。「地域資源の発掘とプロモーション」や「空き家、空き店舗などの遊休資産のリノベーションなどによる地域活性化」などに取り組んでいる。

取り組みにおいては「地域資源を活かした新しいまちづくり」を掲げている（※人・場所・モノ・文化・歴史などまちづくりに資するものすべて）。具体的にはプロジェクトの拠点となるカフェの運営やフリーペーパーの制作などを通じて地域資源を掘り起こし、それを街の内外に発信。また、空き家も地域資源の1つととらえ、持ち主となるオーナーと何かを始めたいと考えている事業者とのマッチングにも取り組む。

プロジェクト開始後、すでに3件のマッチングが実現。新たな拠点が增えることで人の流れが変わり、小さな経済圏から活発になることで、まち全体の活力へとつながっていく活動を展開している。

（東急 磯辺陽介）



BOOK STUDIO

「既存店舗」×「仕組み」

ノミガワスタジオ（事務所兼ギャラリー）とシェア型本屋のマッチング。本屋が無い状況が続いていた池上エリアに生まれた、棚1つ分の小さな書店が集めたお店。運営も書店主たちでおこない、本を媒体にした交流の場をつくりだす。



たくらみ荘

「空き区画」×「池上外事業者」

多世代の人々が学び、様々な「企み」を形にすることを後押しするシェアスペース（探究学習塾「エイスクール」運営）。塾以外にもシルクスクリーンを活用した企画や、三味線教室、子ども向けアート教室などが利用。

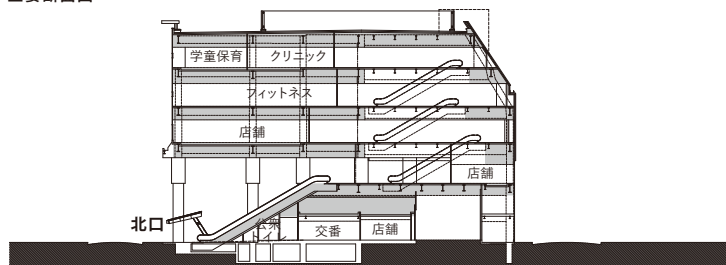


つながる wacca

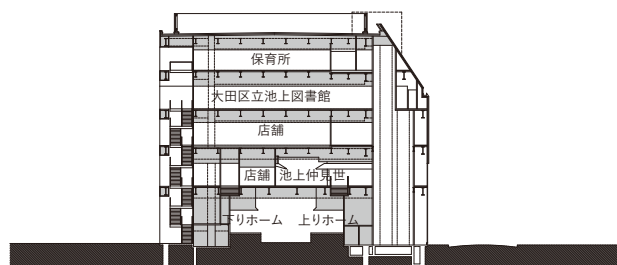
「空き区画」×「池上内事業者」

顔がみえるつながりを大切にした、地域に根差した多目的のスタジオ。介護福祉士の社交ダンサーと管理栄養士のヨガインストラクター夫婦が運営。

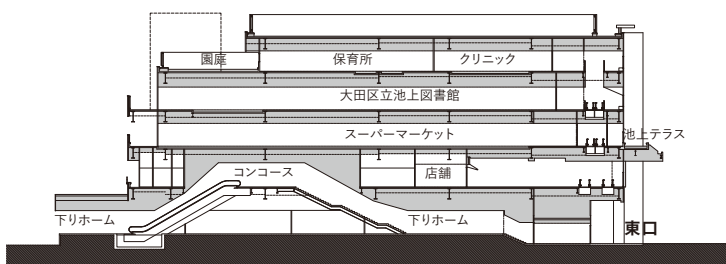
主要断面図



断面図



断面図



断面図

1/1000

池上線池上駅・エトモ池上

所在地：東京都大田区池上6丁目3-10
事業主体：東急・東急電鉄
用途地域：商業地域
用途：駅舎、物販店舗、図書館、保育所、駐車場
敷地面積：3,490.48㎡
建築面積：2,640.32㎡
延床面積：9,525.01㎡
構造：規模：鉄骨造 地上5階
写真：アド・グラフィック（*）
IT イメージング 土戸雅裕（**）



池上駅旧木造駅舎

みんなのえきもくプロジェクト

今回の池上駅改良では「みんなのえきもくプロジェクト」と称し、歴史ある木造駅の記憶を地域の皆さまとつなげる取り組みを実施した。旧池上駅の解体工事で発生した古材（えきもく）をツールにワークショップを開催したほか、地域施設や駅ビルの共用部、テナントで姿を変化させて活用している。

地元の方々と一緒に「えきもく」をつかって椅子をつくるワークショップでは、「えきもく」を実際に手にとっていただくことで、参加者に「駅」をより身近に感じてもらえることができ、池上線への愛着をさらに深めて頂くことができた。

駅とまちとの連携を深める取り組みとして、地元の方に親しまれ

ていた旧池上駅の木製ホームベンチを自作できる「えきもく」キットの配布もおこなった。それらのベンチは近隣の郵便局や信用金庫、病院や飲食店・カフェなど、池上の各所で活用されている。

新しくなった駅ビルでは、テナントと連携して図書館の返却ポストやカフェのアートパネルなどを「えきもく」で作成した。駅舎だけでなく商業施設にも「えきもく」を使用することで、旧木造駅舎の記憶を未来へ継承している。

（東急電鉄 鈴木稔）



ホームベンチの解体



解体で発生した古材「えきもく」



ワークショップ風景

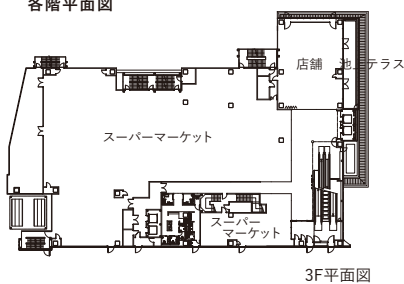


2018年に第1回ワークショップを開催

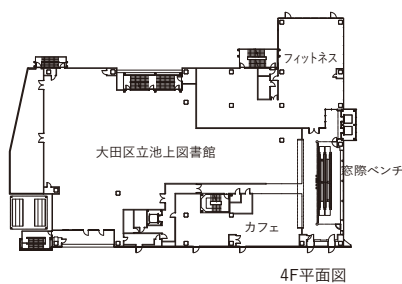


「えきもく」を使用した椅子

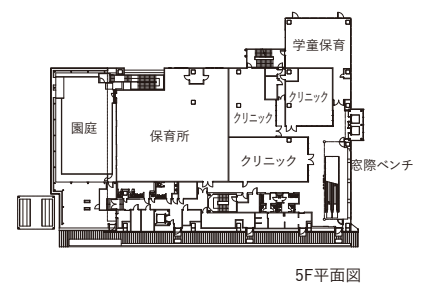
各階平面図



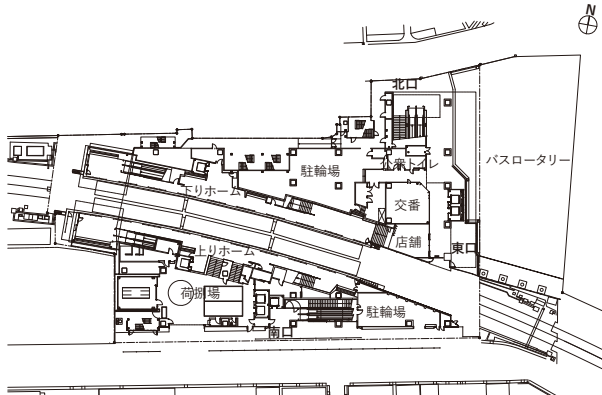
3F平面図



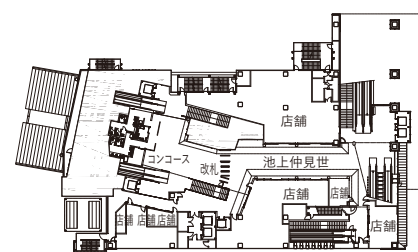
4F平面図



5F平面図



1F平面図



2F平面図

1/1500